埋庚蓮抄

二

へ遠13
1459
2

へ 13
1.459
2

怪談藻塩草巻之二

明星の宮の怪異の話

江戸の海津紅上村百姓勘兵衛とゆゑ生涯貧乏にして正路の者あり寛政の年の暮のころ紅のもとあつて伊勢参宮とて不在の留守にもひ濃家へもいとま乞つゝ出立ちわらふ〜その一村の伊勢の御講あつて元その金百疋ばかりあり〜残幸ひ勘兵衛よこゝろまゝ面白ゐるべーと彩〜〜おどよ勘兵

帛ども残りけるひ甚金を首ふりけるに人間
とゝくさとゞ水晶星のあるうまぐいてるもゝ
ちさうゝ猿痛しうるゝ有どゝ去だゝ〳〵此不
体まんとかたえるる巻うゝ屋の店よたちより
用さのくすりたなどゝ猿〳〵仮不よいてゝんと風
呂敷ぼうゝと持くうゝゝふいうゝ〳〵ふところ
よあゝ金ゝゝ袴ぐうへ納せ〳〵ものまれば
仮不よりけるんも甚ゝあうと思ひそうゝふ
彼風呂敷づゝゝまゝ〳〵入〳〵とゝの甚八法ゝのや

ぶゝより是をとゝてたちまち悪ゝ〳〵動に
帛ゝ仮不よいうゝ〳〵残ううひさ〳〵ゝてひそう
ふ甚風敷包の金とうだひ取ゝのゝ布ふを
ざうのゝ石残いれをゝ動に帛を
仮不残いぞゝ彼ゝ袴とゝふゝをんとせ〳〵甚
あうゝと雲勝ども細せ〳〵ゝばとゝふ
て金をいだ〳〵うぞゝ護魔のゝるよけ〳〵ゝうば
ゝゝんゝゝ残ゝれゝと細布を風呂の中へ
さ〳〵ゝうゝえうゝ童ゝもうゝざゝゝ甚

まくみゝて甚不残たちいでゝのかど二里ばか
りまきゝ行人をさやうのものあてなきと彼細布
と首ふりけんと出せゝぐ行とやゝんすぐさかうう
てうんぬるかふ不審〜中残あらたゝるゝ金よ
いあゝぞまぶろの石まうゝうゞ動ぬ布たさふお
どろ〳〵紀粧奉のぶとゝ乃残引うへゝやぐてうの
甚八う郡よもどり志うくゝのようゝとゝあて行幸
金子ともどゝくゝまようゝと滅をうゝ和〳〵れ
ゞゝ八てゝ紀ゝぬ新してよう紀布ど丹おおふな

つて笑へうさよゝをいふてすうゝうれども動ぬ
郎ゝあ和ぐち不甚八ぐすぐうう是北ともふ
もどゝたまへと一向不たのゝゝ乃ゝ八大さ
ふふうゝんゞよくくもゝ家残盗賊よせう田金
人とおもひてゝうんゝ先刑よりさと残す
きてゝとゝも変ゞをゝ不ゝつのゝまそ抽
い紀ゝ〳〵ゝさと残ゝ家ゝ人の金を往ぐう
ゝゝんとたくむゝう若形ゝん和ゝもれ滅
道筋ふくそのぶとと紀滅ゝうるゝうぶとふ

おどろくべきやとあり金銀義理ともつて訪に
帝を囲ぶけ打ほくるぶとまろふ本ろうーく
もさけどもいはのうせーえるぶぞとこに人
立ろう彼勘に扉を作づへおて打さくくさん
ぐふ打擲ーろまとぞ訪ぶうまー死さん生よぶ
ま金銭ろまとあまつさへ彩ろぶ打ちゆーろ
あふとゆへども法拝ぶろまとぞせんうさるくに
さどくと其あをたちいぐを祇ぶまふで
あまとに式を寅の疑をのぶれまぞーをねせ

先たまへと彩毒銭ろーー拝衣を日ふつぐく
紅上村ふ帰ろうさろくのよーをゆへぞ百姓ふ大ま
ふ寡ーー勘に帝ふろざりよもやとん男へども自
彩出来ざろふておの金を盗ーるさ盗賊ふ
あるーあどく偽ーーものとさやに々ぶるあど
に勘に扉を金さちへぐろ人ふ盗人と疑れ
生て伊の甲斐あーんとやぐておーの田地ぶ
屋敷をうまれひ其金をもつて伊勢講をつ
くのひ其弟八回ふせんと立いぐーぐ元来おし

のたくるまでは日数経るまでさぶみて涼用尽
はて終に乞食とうりて人の俤ともし月
日とともにうち寒さまさ苦しき暑氣はたえ
て秋風ようやくわたろへ次第よりうり炉ひる
ぐ〳〵冬ぐ〳〵三年経て再び明星まさり彼家
八ぐ家よりうるまで今は住居もうらしぐその
あらうあく拾ふ銭さ〳〵ふ彼碁八は去る年ん
おとり紀役けおとあり〳〵由ふて今は彩〳〵
き家銭お先小間拾をあさるふ形りと其家

とわ〳〵へしらべ勘定帝拾ふ家金ふてさゆうの店
を出せ〳〵ものうるべしと彼家の妻まいうり団をと
ふふ碁八ぐ屋和よ形るを見付つうくと内よ入
て家八をとくとふ〳〵み已三年ふあ家金を盗
〳〵ふと銭見えはく〳〵んと罵り〳〵碁ぐん多よ大
たん不敷の家八もぐつと身の毛よだちしぐ
ふてんとさるたをと銭とへ動ぐ大よ妻を上
げ伊ふ金と家業をせんうる形く家屋敷田地も
うるれひ碁金をつくのひ今はひざ〳〵乞喰

とゝたるかも猶汝が仕業なり此恨るんぞあんの
んゆて至べきやと罵りれど甚八もを不乃を
あの面目なく無といろ〳〵件を形〳〵汝先年系
よ無実をとゝうけ形もあさはどして再ひ来り
ちまぐの毛をとゝ〳〵ふかてを借用のうを
食ふ仏合ゆうふ修相を求光ざるや汝がめく人よ
祈ぐう業殘をとゝう取んとをる不存ゆへ甚不残
長〳〵を元恰こゝ為るぞとの〳〵をへ〳〵を合
うち村の毒人うけ来り彼を恰をとゝ〳〵ふあ

きへく村をづまで引おせり勘四郎が罵り
あぐ〳〵清村国分ちるの門あよりひとをうふて
人よ食を求光居ろ〳〵げ病つるを〳〵上ず擲
ふをひ〳〵ゆれば足腰も立得ざ仕不ず汝
よ宣〳〵く放りるを寺僧是我あるれみやある
方よ葬たり甚八身よ光へあるるを〳〵勘四郎
のふ〳〵〳〵を面部目の先みち〳〵付てをれ
ゆ〳〵只うつ毒のおとく炬ひつきしげその
墓の沢勘四郎が墓不より大さ形る墨拔ふ

延湯いぞく甚八ぐ門をけしてあるき庭柏よりそ
つさーかどをかくさんさふ寓しめづらし紀
ちとうりと見相数多おりしぐ形のごとく成
る夕毎数ふーて数ごとあ多くうり内ふとび入
く甚八ろ寝たる女性慢のごうとあまりー内よ
ぐーんくーとたとふ八ちものふおてらまーごとく
あーー苦ーやとあ多をごうふ叫びしぐ家内の者
ふ彼宮城長てんとたとれども力おーぶさをはよち
ま湯を桶ようくーー入宮よむけあぶせうけて殺

ちーーうども宮ふまちたくく釜んよ殺いりあ六人
のちーーあも是城制さるまちとあさうどとふ
のもうどもふあそれ甚八ぐを神名へを納せ
しー金戎盗ーー神罰るをで彼ちるを殺さふ
を神宮への名とあをと俗あつく是と殺ふ
者ふくいぐづーふ見相せう形のごとくをるす
廿日ごうふーて後よ数慢を食やぶり甚八よれ
つくまと数ふ延るうーーうぐを八ちたぐ叫び
苦ーをひまうりおどう上つて死ーたうー

ごかのとり付しぐ蛍ハうゝみつ附よさんせゝや
らん人のゑくぎとゝ紀夢とあげいづゝともゑ
くちり失ゝり其ほゝあくて名ざりゝと
まゝとみ人のうゑ産えんのゑまとゝゝ紀とゝ思
俄ゑりゝゝとゝ形りさ

戸浪山怪異の話

紀伊国ゝ戸浪山と云る大山あり其山奥よゝ
山神の住たまゝるよゝゝて彼山おくゝよ入る者
ハ再び出ずゑゝ紀よゝゝつゝへて迷失編人も

あへて彼山奥へのがるゑゝとゝりゝゝゝまより
ゝどちゝ紀村よ深見八郎といゝゑ大猟不て
紀れ浪人ありゝゝゝ彼山奥よハ抜よゝ変の樹
木も多くあゑみ山神ありとて其まゝゝゝい
ゝゝ変んハ世のつゝいえゝり家彼山おくゝよ入て
妖怪の有ゝを見たゝゝさんと常ゝ畜ゝさゝゑゝ
とつゝ変代の名刀を常ゝて彼山まおくゝみ
ゝけりゝゝゝ乃とゝても形く大木あゝ模たり
其検迫ゑゑゝとゝ云ん方ゑゝさゝゝども別条の

八帛まれびとび城くく七八丁もおくへゆりしふ
樹木すひ出げまはとよ尺すの明不もゆく
向ふ小脇して入べさ方もゆうしふ今まてを
しゆ彼太大さ十高也しゆ体て八帛が見えまを
くこうくれしうび八帛太さふいういうぐさ侍
よ帛ゆべさと彼太城ととへ樹木のうちへあを
入ゆと等しく太いゆさ叫び八帛が新へむけ
投ゆへせり八帛是ゆも出ぎとよ大城投のれし
うびは度へ彼太城引さ紀何者とも知ぎと投

出せぐ八帛またくいうり勢をいぐして彼
樹木を切ちこひくよ二三丁もすけ入よ何の
怪しゆもゆくなんゆ虜へ出ぐうされ
より松柏一株もゆくはを数ゆへしごとく
其辛藤ゆる事いふ引すそおをもよは五丁
行ぐぐ海と屏風を立たるおと紀大宮あし
をゆうくよ偽ひよりは方をゆるよ盤石おけ
むしてまはと丹仙赤ともそべさ傷地うり八
帛碧しは和よ体こひあうりの小栗を取あつ

老て犬を付あくろう庭大きまとねて勇ましき姫よ
十倍〳〵擾ろう姫を飯殘ろう出〳〵食せんとも
ろよ付とゆくんろうさろうふ人きのまゝろるよ怪
〳〵と耳そが立て異くと安よ思ひもろうぬほの
方よわき洞あろう〳〵ぶ其中ろう丈二尺許の
男子白髮地を引面を幼きのめゝうる若いで
さたり姫とも云ぶとゆ殘さゝ出て大ふあられ
を八郎見よおゝもろうぬ彼飯殘喰んとする
よ彼蛟見くをえて食殘きて取んとゆ八郎大な

いろりやぐく擾を飯よ刀殘つさちゝ蛟の目
およさゝ出ゝ取ハ只一突よさゝ殺さんとか
まくゝを彼蛟付の苦もろくゝ只一口よ喰て逃ハ
八郎ねろうと突んとさるふ五體かぐんて動ろ
ぶ只立さくゝて居ろうしぐ彼蛟ひよんな
くかもとをふ喰擾ろ志川くとたち居れ
ハ八郎ぐふ體ゆうくふさらくさとをゆ
て這くの仲まて家家よろうしぐ丈ろう
病つさて百日ぐろうもうち明ろうあるふ人

彼(うの)おさ羽ぐ咬(くひ)たるるるの緒(をと)を残見(みた)たる
よしうたりぬいうる茂者(まるもの)るまおとよ亭怪(きくわい)のお
とうるさ

怪談もしほ草巻之二終